
青い髪のシリーズ

” 太った猫 ”

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い髪のシリーズ

【Nコード】

N8637R

【作者名】

”太った猫”

【あらすじ】

くの髪の魔物 シリーズ 第二弾、やっぱり、暴れます。

青い髪のシリーズ

髪に櫛フシを通し、爪先を整える。清楚に見えながらも女の色気をほんの少しだけ残すような服を選ぶ、鏡の前で、最高の微笑みの練習を数回、そうして深呼吸を三回、扉の前で覚悟を決めて、三、二、一

その青年の顔を見て一呼吸、その柔らかな笑顔に圧倒されながら朝の挨拶を交わす。彼が無事出かけるのを見送って、扉の陰に戻る。頬がゆるみっぱなしだ、きつと私の頬は心地よい紅色だ。

『やれやれ、シリーズ様ともあるうものが、なんたる様、なんたるでいたらく、あの冷徹としたシリーズ様はどこに』やれやれという仕草さえ聞こえそうな程、その言葉は私の頭に響く、だからどうしたというのだ、この幸福感、この充実感の前にそんなもの等たいした事ではない。

私の名前はシリーズ、青い髪の魔物だ。そう、私は今、ありえない事に人間に恋をしている。

ちゃんと笑顔で挨拶できたろうか、自分の顔は火照りすぎていなかっただろうか、髪の毛はきちんとしていただろうか、去り際に自分はドジをしなかっただろうか、彼は、私の事を覚えて、そうして、好意を持って見てくれただろうか？

『…』ため息という名の沈黙が頭の中に響く”彼の名はマズロウ”故あって、私の中に居る。

夜より他に唄うものはなく

俺の名は鮮烈ファンゲなる牙 マズロウ、消え去るる運命だった魂の名だ。

その日も、俺は情けないことに、人間どもの出したゴミを漁っていた。そこはわりと程度の良い残り物をくれるところで、俺は気に入っていた。

旨い飯を作る作れるやつは、それだけで尊敬まほつに値する。いつもの日常、いつもの行動、滞りなくその日も終わるはずだった。

油断と言えばそれまでだ。笑うが良い。そいつは唐突にた現れた。いわゆる狂人の類というやつだ。放っておけば良かったのだ。その店など、急に何を思ったのか、ついでの食事を俺にくれようとした人間やっの事など、戦闘と呼べるものもなくそれは終わるはずだったのだ。包丁を振り回す狂人など、一蹴できるはずだった。

今は、人間達の時代。混沌の時代、暁あかつきの黎明は終り、戦場はすでに遠ざかり、満ちたりた死にはさらに遠い。

俺は、黙ってそいつと対峙する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8637r/>

青い髪のシリーズ

2011年10月3日21時53分発行